能代おもしろ映画祭り開幕

加藤正人さん、笠井渚さん迎え

出身者2人の作品観賞

講演、舞台あいさつも楽しむ

「能代おもしろ映画祭り」が30日、能代市海詠坂の能代山本広域交流センターで開幕し、同市出身の加藤正人さん(70)が脚本を手掛けた映画「破戒」(島崎藤村原作)、同市出身の俳優笠井渚さん(41)＝埼玉県在住＝が故郷を舞台に制作したショートドラマ「秋田県能代市に生まれて」を上映した。加藤さんの講演や笠井さんの舞台あいさつもあり、約170人の来場者を楽しませた。きょう1日は黒澤明監督のモノクロ映画3本を上映する。

「私と映画」と題して講演する脚本家の加藤さん

「私と映画」と題して講演した加藤さんは能代高1年だった昭和44年夏に東京で見た前衛的な映画に心を動かされて映画界への道を志す決意をし、早稲田大を中退後も独学で脚本を学んだ。脚本の筋をつくるプロットライターやゴーストライターなど「絶望もした」と言う下積みを経て30歳で脚本家になる夢をかなえた。自身の脚本について「人に会って話を聞き、現場を見て調べ、資料を集めて専門家にも当たる。取材に人の何倍も時間をかけ、丁寧にコツコツと作るので作品は年1本と少ない」と述べた。

俳優・笠井さん(左)の舞台あいさつも行われた

部落差別という重いテーマを扱った「破戒」は、差別解消を目指す当事者らでつくる全国水平社の創立100周年を記念して制作した映画で、被差別部落に生まれた青年の葛藤を描いた。加藤さんはリメーク作品は前作と比較されるため最初は脚本の依頼を断ったことや、差別用語を使うために部落解放同盟に許可を求めたこと、当時と時代が違えど今もマイノリティーなどへの差別が残る普遍的なテーマなことを説明。明治39年に発刊された島崎の原作にはないせりふも多く取り入れたとし、「原作を変えても原作のままだったと言われることがうれしい」と脚色の妙を語った。

本県では上映されなかったが「低予算の小品で、上映する劇場も観客も少なく、地味で真面目で社会派な楽しくはない作品だが、このような脚本を書いて良かった」と意義深さを述べた。小さい頃に能代市内に5館あった映画館で楽しんだ思い出を語り、「映画を好きになった古里能代の人に自分の映画を見てもらうことはとてもうれしい」と結んだ。

「秋田県能代市に生まれて」は能代ふるさとPR大使も務める笠井さんが春、夏、秋、冬、春編と四季を通して手掛けた短編ドラマ。ライター役の笠井さんが地元住民から話を聞いたり、地域資源に触れたりしながら、今はなき能代北高を卒業してから長く離れていた能代の良さを見つけていく内容で、昨年から能代や東京都内で撮影し、映画祭りで5編を通して上映した。

舞台あいさつに立った笠井さんは「作品を見て能代の良さを発掘してほしい」と呼び掛けた。上映後は、オーディションで選ばれたTatsuyaこと中川達也さん(39)＝同市寿域長根＝がドラマの主題歌「渚」を歌った。

映画祭りは市内外の有志による実行委員会が地域の文化を盛り上げようと平成29年から開き8回目。1日は午前10時から黒澤監督の「用心棒」「生きる」「天国と地獄」を順に上映し、午後1時から加藤さんが黒澤作品の魅力について語る。